

浄土

1982-7

昭和十年五月二十日 第三種郵便物
昭和二十四年四月二十八日 運輸省（加投承認雑誌）第三二五号
昭和五十六年二月二十五日印刷
昭和五十七年七月一日
第四十八卷



胄 袖



ちのいのていられか生

久方ぶりに芝公園辺りを散策してみた。梅雨暗れのせいか埃りの洗われた緑が美しく、映える紫陽花のあざやかな彩光が眼にしみた。ふと三十七年前、この辺りは戦火に包まれ灰燼に帰してしまい焼野原だった往時をしのびながら、焼土に一本一草も生えることが困難のように思われたのに、いま自然は美事に蘇り、地上は緑に覆われた。大地は瓦礫のみ、汚染を浄化して新しい草木の生命を地上に生み出した。まさに大地はすべての生命を育くむ母である。

増上寺の境内に歩を進めた。正面の大本堂の傍に可愛い地藏尊が数多く安置されている。緑の風に吹かれて、地藏尊に飾られた風車が勢いよく廻っている前で、老母と幼児が両手を合せて真摯に祈っている姿がみえた。老母のうしろ姿には、無縁仏や水子の供養と幼児の無事を祈っているように感じとられた。

思えば人の生命は、身近かには父母の慈しみのなかに育くまれるが、いのちが全うするためには、生きとし生けるあらゆる生命―大自然の恩恵をうけて成立するものである。祖先のご苦勞、有縁、無縁の人々のお力、動物、植物のいのちを提供されて、いまこの生命が生きつづけているのである。生きていくというよりは、生かされているのである。懐しいお盆は、まさに祖先に敬虔の祈りを捧げると共に、一切衆生に感謝する人間の生命に対する本源的な行事である。

(宮林昭彦)

|| 七 月 号 ||



深諦として善く諸仏の法海を念
じ、深を窮め奥を尽してその涯
底を究む。

——『無量寿経』敷仏頌

目 次

——おほん法話(上)——

立て前と本音……………宮 沢 善 弘……(2)

(一) (口) (法) (話)

釈尊の中道と易行道……………村 瀬 秀 雄……(6)

エッセイ

今日のソ連仏教……………坂 野 泰 巨……(8)

<勢至丸ものがたり>第二回

宇宙船「小犬号」,「鯉号」……………布 村 哲 哉……(13)

念仏するもの……………梅 辻 昭 音……(18)

インド文学の香り……『パーガヴァタ・ブラーナ』抄訳(Ⅱ)

地獄について……………小 山 典 勇 ……(24)

詩・・・暑い一日……………清 川 宗 治……(35)

<読者のページ>

短篇・・・「草むしり」……………山 中 はじめ……(30)

浄土句集……………一 田 牛 畝 選……(28)

<表紙裏・巻頭言> 生かされているいのち……………宮 林 昭 彦

念仏ひじり三国志⑧——法然をめぐる人々……………寺 内 大 吉……(37)

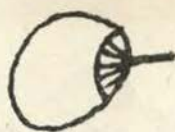
表紙 大西耕三画

カット 大正大学美術部

おぼん法話

(上)

立て前と本音



みやざわ ぜんこう
宮沢 善弘

(大本山光明寺執事
横須賀市正観寺住職)

おぼん法話ということで、上下二回にわたりお話をさせて頂きますが、特におぼんにこだわらず、むしろ、元祖法然上人降誕八百五十年の佳き年に因み、視野を広げてお話し致しましょう。

昨年、教区の教化パンフレットに「うら盆経の心」という一文を載せて頂いたところ、当分たつて年の暮れ、ひょんなところで、それについての感想を聞くことができました。

実は、ある会合で、こちらは全く見知らぬ老人でしたがこう話し掛けてきたのです。

「今年のおぼんに仏壇を買いましたら、仏具屋があな

たの書いたものをくれましてね。わたしは今まで、おぼんを何とはなく単なる先祖のまつりだと思って、習慣で形式的にやっておりました。あなたのものを読んで、おぼんのお経の積極的な意味を知って、実のところ肝銘しました。

それにつけても、お寺さんがもっとお経の真意を教え下さるとありがたい。これからはお坊さんも、それに沿って一層社会的に活動することが必要となりますね。」
わたくしは、自分の書いたものを、仏具屋さんがそんな風にご利用したことは知らなかったのです。ちょっとびっくりしましたがやがて、お坊さんも、それに沿って一

層社会的に活動することが必要……」という指摘を一種の指弾であると気が付いて、恥ずかしい思いをしたのであります。

それに沿つてとは、經典の真意のことであり、^{ぶつち}仏意に沿つて、であることは明白であります。

わたくしが書いたことというのは、かい摘まんで申しますと、一般におぼんの行事は「うら盆経」の所説に由来すると説明され、その際しばしば、經典の物語りの側面の方はよく引用されておりますが、深奥にある仏意（真意）の方は案外に取り上げられず、それが現代の世相にどう適応し、現実的にどのように機能するのか、いや、それを現代社会にどのように機能させるべきなのか。そういう視点は必ずしも明確でない。従つて、今日的な効果的アピールを弱くする、と、そう思いましたので、改めて大蔵經の原典に当たり読み返すと、經文に潜む仏意は、自制・人間的連帯・全体への奉仕、以上の三点であることに気付いたと述べたのであります。

わたくしは、釈尊ご在世の時代と今日とを断絶させて考へてはいけないと思つています。

対機の仏法は、よしんば個人に対する説法の形態をと

つても、実は一般性と普遍性を根底におき、何ん人にも究極的には妥当するものでなければなりません。また、時と場の新旧をも超越する心理でなければならぬのであります。「うら盆経」が直弟子目連様に対してのその亡き母を餓鬼道の苦難から救う仏説ではあつても、すでに誰にも当てはまり、特に重要なことは、今日において一層適切に世相に当てはまり、万人にとっての真理であるということです。「うら盆経」が千年も二千年も昔からの經典として存在し、現にわたくし達がこの經典に由来するおぼんの行事を毎年営むことは、大變尊く大切にすべきです。墓参、寺参り、棚経、精霊流しなど、古来のしきたりをそれなりに意義あるものと認めながらも、今更に今日的な意義を見出して実践を付加し、それによつて、二十一世紀に向かい、仏教の将来性と、今後のあり方の基礎を確保しなければならないと思うのであります。

ここで、いささか重複を致しますが、「うら盆経」の仏意を、自制・人間的連帯・全体への奉仕として拝受するわたくしの考へ、その根拠を簡単に述べておきます。

第一は、神通第一と称讃されて超々能力者であつた目

連様に対し、仏説は亡母の苦難の救済には「汝一人の力ではいかんともし難いことである」と説かれたことから、これを、慢心への抑制と取り、自製の喚起と受け止めたのであります。

第二は、「諸衆僧の威神の力こそが救いとなる」と説かれたことから、人間の総集合、つまり和合の力を取り、平和の維持に向かつての人間の努力と取り、人間的連帯の喚起と受け止めたのであります。

第三は、諸衆僧に対する供養の所説の部分を、全体への奉仕の喚起と受け止めたのであります。

今日わたくし達が直面し、これからのわたくし達にとって、好むと好まざるとにかかわらず、避けて通れぬ大きな問題の一つに高齢化社会への推移があります。

この問題だけに限ってみても、これは大変な時代を迎えることになるのであります。

高齢化の問題は、平均寿命が伸びて長生きする人が多くなるという、それだけのことを心配する問題なのではなく、それもさることながら、問題の本質は、むしろ、全人口の中で高齢者（老人）の占める構成比率がべら棒に高くなり、社会の人的構成のアンバランスにどう全体と

して対処するか、これが重大となるのであります。

日本の高齢化は、昭和二十五年には六十五歳以上の人が占める人口構成率が四・九%であったのに、六十五年には一・一%になり、二十一世紀を迎える七十五年には一四・三%になるといわれています。その後も二十年を経ずして二〇%を超え、世界でも類例のない超スピードで高齢化し、国民の四人に一人が高齢者という、いわゆる若年層の少ない逆ピラミッド型の、文字通りの高齢社会が出現すると推計されております。

一方、総理府広報室の世論調査では、高齢化社会を迎えるに当たっての不安として、十分な年金がもらえないのか、税金や保険料、医療費などの負担が増えるのではないかと、健康でいられるのか、勤め先があるのか、寝たきりになったらどうなるのか、という様な心配が、生きがいや世代間の意識の差に対する心配よりもずっと高率で回答されております。

なお驚くべきことは、不安の見当さえつかないという気持ちの現われか、「わからない」の回答が、右のどの項目より一段と多くて、しかも何れの世代をとっても最高の比率を示していることであります。

わたくし達が、歴史の中においてさえ、いまだかつて経験したことのない高齢社会、そうなったら一体どうしたらよいのか、不安が一杯だ、というのがこの調査の結果です。

お互いに他人ごとではありません。現実として、または早晚、誰でもが直面しようとしているこの事態は、更に複雑であり困難なものでありましょう。そうして、これらに対応するために、何にすがを求めて生きたいのか。そこでわたくしは、前の自制・人間的連帯・全体への奉仕という仏意を思い返してみるのであります。

さまざま人間の生きざまに共通して、不退転の根本倫理となるものは、絶対経験者たるみ仏の言葉以外にはないと思うのであります。人間は経験を尺度にして生きています。それなのに、高齢社会の経験はないのです。さすれば、絶対最高なるみ仏の深智にすぐる外はない。仏説は真理なのであるから、と確信する外に最善の道はないのです。

今日、立て前はそうであっても本音では違う、とよく聞く言葉です。

身のまわりで起こる日常の小さな、低い次元での出来

事には、ままそういうことが通用するのかも知れませんが、より高い次元で特に人間の基本的な生き方とか、人間生存(サバイバル)の極限においては通用しないでしょう。

人間の立て前とは何か。これをじっくりと考えて明らかにし、それを貫ぬく姿勢、覚悟、努力などが、どんな立場の人にも必要となります。そこでは、俗にいうところの本音などは逃避と同じです。本音などといってみたところで、人間の生存(将来)は成り立たないはずであります。

仏教徒たる者の立て前、それは仏意にあると申し上げたい。そうして、この立て前に徹して生きるための支えとなるもの、例えばわたくし達のごとき浄土宗門徒にとっては、元祖法然上人のありのままのご生涯、「念仏為先」のみ教えの外には何もない、と、こう決定を新たにすることです。

本音ということをあえて使うとすれば、この決定こそ専修念仏者のそれがあると申せましょう。

(つづく)



(一) (口) (法) (話)

道行易と道中の尊釈

お雄 秀 瀬 村
ひで せ むら

仏教は中道の教えであるという。中道は対立を離れたところに広々と開けた新しい道であった。虚無と常住、利那と永遠、苦行と享楽という対立の中にあって、どちらにも偏せずに中正の教えを説いたのが仏教である。釈尊は恵まれた宮廷生活の中で、不自由なく妻子と暮らしていたのに、あえて家を出て山に入った。そして苦行主義者の許で求道に励んでいたが、その修行もまた捨てて山から下りた。まず尼連禪河で沐浴して身を清め、少女難陀波羅が捧げた牛乳の供養を受けて疲労しきっていた身体に活力を与えた。正しい生活には正しい衣食が必要であったからである。そして仏陀伽耶に赴いてから菩提樹の下に吉祥草を敷いて坐り、瞑想にふけた。

大陸の太陽は直射を受けると思わず目眩がする位に陽射しが強い。しかし一度木陰に入って乾燥した風に当たると、すがすがしくて暑さを感じない。釈尊が大きな菩提樹の木陰に入ったのは、涼しい場所を選んだからに外ならない。しかも吉祥草は古来から祭場に用いられていた敷物のことであるから、釈尊は柔らかくて厚い座布団の上に坐ったのである。最も快適な場所を選んで無理のない姿勢で瞑想に入り、愛欲と苦行を離れた智慧によって

実相を見詰めたところに、この世に初めて中道の教えが樹立されたのである。

法然上人は十五歳のときに比叡山に登って勉強に努めたが、天台教学がたてゐる魔立の教判を十分に理解したことは鏡に物を映すように正確であつたし、妙理の観法を体得して磨きあげた玉のように輝きを放つていたといわれている。やがて知恵第一の高僧であるという評判がどこでも聞かれたし、多聞高学の名僧であるという噂が広まった。高倉天皇や後白河法皇に授戒申しあげ、また東大寺再建の勸進職にとの内命を受けたことだけでも、いかに上人の名声が高く、また一流の学僧として広く認められていたかを察するに十分である。その上人が聖道門を捨てた。聖道門とは南都六宗を始め天台、真言、禅宗九宗のことであるから、当時わが国にあった教理と修行のすべてを捨てたわけである。聖道門が深遠な哲理を説いていても、一般の人々には理解し難いし、今時の人々に適しない至難な法門であるとした。修行もまた難しく普通人の力では及ばない難行道であるとした。つまり一般の人々からみれば、聖道門はあつても自分たちに関わりのない法門であるということになる。だから人々

に本願という大船に乗ることを教え、楽々と苦海を渡つて彼岸に達することができる易行道を勧めた。善導大師のお言葉に、「仏の大慈悲はこの世で苦悩する者にこそ向けられている。だからこそ釈尊は苦悩している凡夫に対して極楽浄土に往生できる法門を示し、その修行を人々に勧め給うているわけである。たとえば目の前で水に溺れかかっているような危急の者こそ、急いで救つてやる必要がある。岸の上に立っていて何も危険を感じていない者に対しては、殊更に急いで救わなくてもよいのである」という一句がある。法然上人は新しく浄土宗を開いたことについて、次のように説いている。

「新しく浄土宗をたてた意味は、凡夫といえども極楽浄土に往生できる法門を明かすためである。もし浄土宗をたてなければ、凡夫が勝れた仏国土に往生できる教えが隠れて、念仏を唱える者をすべて往生させるといふ阿弥陀仏の本願が人々に知られ難くなる。浄土宗をたてたのは他宗より勝れていることを示すためではない」

上人こそ釈尊の自然な姿を顕正した原祖なのである。

今日のソ連仏教

坂野 泰巨
さかの の たい きよ

(茅ヶ崎市西蓮寺住職)



——ヴェルヒノイディンスク(ウラン・ウデ)は鉄道の最後で、わたしたちはここで鉄道とはこの旅行中ずっとお別れすることになる。ここから南には、すでに広漠たる草原が広がっていて、遊牧民族——ブリヤート族、モンゴル族や、色はなやかな衣装をつけたラマ僧の姿が現われる。ここの仏教の僧正であるハンボー・ラマ、イロルトウイエフはわたしを、ハダク、つまり△幸運の布▽(絹あるい

は木綿の長い布で、通常黄、黒、白、またはうす紫。いちばん長いので三メートル半から五メートル。しかし、一メートル半にならないものもある。この種の布には飾りがついている。たいてい長途の旅の守護神アニシイを織ってあることが多い)をもって歓迎してくれた。そしてわたしたちにとって重要な言葉でその挨拶をしめくくった。「あなたがた、生まれながらの探検家の一行は、再び、穏やかな仏教に帰依する住民

の国へはいられるわけです。この宗教には数百万の信者が属しています。この仏教の国はあなたがたを愛しています。あなたがたも、きっとこの国を愛してくださいるように。そして今度は、この国はきっとあなたがたに、貴重なものをお贈りするでしょう！わたしはこのことを堅く信じて疑いません！——

コズロフ大佐は、一九〇七年から一九〇九年にかけて、今日のウラン・ウデ（ブリヤートの首都）からウラン・バートル（モンゴルの首都）へ入り、モンゴルを踏破し、「死の都・ハラ・ホト」の発見、発掘をした。

そのときの成果をまとめた探検記『蒙古と青海』のまえがきの一節である。

さて、昨秋のことである。私はソ連・モンゴル訪問日本仏教代表団の一員に加えていた

だくご縁にめぐまれた。

これらの国々とのわが国唯一の交流窓口であるABC日本センターのご配慮で、ソ連仏教会およびモンゴル仏教会からの招待を受けたのである。

通訳を含めて八名、中央アジアの仏教研究者が主体となった小グループで、二週間にわたって各地を親善訪問した。

この両国の仏教については、近年、ほとんど知られてないのが実情であり、わが国の書店でさがしても、今日の両仏教を知る資料は皆無と言ってよい。また、地図やガイドブックのようなものも、見つけることができないままに出発したのである。

コズロフ大佐は、レニングラード——モスクワ——イルクーツク——ウラン・ウデ——ウラン・バートルのコースで、探検に入れたのである。

対比することはおこまがしいが、私たちは、イルクーツク——ウラン・ウデ——ウラン・

バートル——モスクワ——レニングラードのコースである。

コズロフにあやかっただけ、探検のご苦労を味わいながら、旅をさせていただくのもありがたいことだ。

バイカル湖の西、イルクーツクからアエロフロートの小型機で、バイカル湖の東にあるウラン・ウデ空港へ——。ところが滑走路は舗装されておらず、草原の上に着陸したのだからびっくりした。

ウラン・ウデは、ソ連邦・ブリヤート自治共和国の首都である。一般外国人の入国は、特別の場合を除いて許されていないと聞いた。そのことは、私たちのウラン・ウデ訪問について、ソ連邦の旬刊誌に大きくとりあげられたのをもてもわかるような気がする。

ウラン・ウデから四十キロほど牧草原を走ったところに、ソ連仏教の総本山イボルガ寺

院があった。ソ連仏教徒中央宗務局長でもあるハンボラマ（管長）は、ジャンバル・ドルジ・ゴンボエフ殿下である。

ちなみに、チタ州にも大本山が一つあるとのことである。

私たちはイボルガ寺院に着くと、山門のところに大ぜいの僧と信者が合掌して並び、楽器を鳴らしての大歓迎であった。

正面には数年前に新築されたという大本堂があり、裏手には諸堂が点在し、多くの僧房が立ち並んでいる。左手には二階建ての宿坊があり、私たちは一人一部屋ずつ与えられた。

部屋から境内を眺めると、フルデ（回転式経蔵）を廻す人、常夜灯にバター油をそそぎ供養する人、本堂前で五体投地する人たちが目にとまった。彼らは近くの集団農場からきた信者だろうか。女性は地味なオーバーコートにネックチーフをかぶり、男性は蒙古服や背広で皮の長ぐつに中折帽のようなものをかぶっている。みな農民風である。

本堂では、日ソ合同の大法要がおこなわれたが、ご本尊は三・五メートルぐらいの彩色された大釈迦牟尼仏であった。（旧本堂のときはツォンカバがご本尊であったとのことである）、そのご本尊のすぐ下にはハンボラマ猊下の高座がある。ご本尊と同じように外陣を向いて着座するようになっている。

式衆や随喜僧の席は、ハンボラマ猊下の前方、ご本尊に向って右手がブリヤート側、左手が日本側とのことで左右が向い合い、あぐらをかいて着座した。この席は、ハンボラマに近い座台が一番高く、次第に段差がつき低くなっていく。長老の順に坐るらしい。

初めにラマ僧の読経（チベット經典）、次に日本側は各宗派の選択したものを読経、そしてチベット風のカネ、ドラ、太鼓、六メートルもあるラッパのごとき大楽器を鳴らしての大法要となったころ、集まってきた信者たちはそれぞれ日ソの両長老に何がしかの布施をし、長老から額に数珠（？）をあててもらう

のである。外へ出ると信者たちは、一列に並び、私たちにも合掌して額をよせてきた。

ブリヤート人は、日本人の顔に実によく似ている。何やら私たちのご先祖に出会ったような感じがした。

ソ連仏教というので、いわゆるロシア人が信者なのかと思っていたらそうではなく、ブリヤート・モンゴルといわれるモンゴル系の人たちなのだ。

ソ連邦・ブリヤート自治共和国の総人口は、あの広漠たる国土に八十数万人といわれ、近來、スラブ系ロシア人が多く、ブリヤート人はチタ州を含めて三十五万数千人とのことである。ブリヤート人のブリヤート自治共和国でありながら、今日、ブリヤート人は少数派になりつつあるようだ。ブリヤートは独自の憲法をもち、ソ連邦国家は信教の自由を保障しているという。

今日のブリヤートは、ウラン・ウデをみる限り、国営企業も多部門にわたっており、集団化も進み、教育、文化、鉱・工業、通信、運輸などの改善によって、かつてはザバイカル地方のステップを移動したモンゴル・ブリヤート人の生活にも大きな変化ができていく。

そうした中でソ連仏教、すなわちブリヤート人の間で伝統的に信仰されているラマ教（チベットのツォンカバが開宗した戒律の厳しいゲルク・パ派＝黄帽派）は、新世代と共にどうなっていくのだろうか。

イボルガ寺院、チタの寺院を含めてもこの二大寺院が存するのみである。現在、イボルガ寺院にはラマ僧二十七人、チタや各地への派遣僧を含めて五、六十人らしい。みな独身が義務づけられ、ラマ僧はモンゴルで五年の修行をするとのことだ。

モスクワには、ソ連邦閣僚会議の直属機関として宗教評議会があり、ソ連仏教会のドウ

ールマ女史らが活躍されている。

ラマ僧の話では、この大本堂もすべて信者の浄財喜捨で建立されたと言う。信者はこの国の二十の地方からやってくるし、信者の要請があれば三百キロの道のりであろうが、どこへでも出かけて行く。死者の儀礼についても、初七日、四十九日の儀式もする。寺に大きな行事があれば説法をすることもある。個人的には僧房です。寺の経営はすべて信者からの財施でまかなわれ、僧や従事者の給与も決められている……と。

イボルガ寺院では、私たちのために心のもった歓送会が催された。その席で、あのコズロフの一節にもあるごとく、長老から旅の安全と長寿を祈る言葉があり、私たち一人一人にハダク（幸運の布）とバイカル湖の清水をくださった。

ソ連仏教に幸あれ！

勢至丸ものがたり 第二回

宇宙船「小犬号」、「鯉号」



わたしは 勢至丸（せいしまる）。

わたしが 宇宙船「ナム号」と共に 宇宙から旅立って この地球に来て 早や八年。

時々 思ひ出す宇宙での旅。

あの はてしなく広がる光りの世界と そこにあふれている よろこぶ世界。

「よかったね」「うれしいね」といい合えるところ。

そこでの楽しい旅。

それは さまざまな人や いろいろなものとめぐり合える なつかしい旅であった。

その宇宙の旅は この地球へ来てからも続いていたのであるが。

ぬの
むら
てつ
や
布村哲哉

「おめでとうございます。」

みんなから お祝いされて生まれた わたしは 何でも楽しい毎日をすごしていた。

父である漆間時国(うるまのときくに)、そして母はいつも わたしの頭をなでながらいうのだった。

「あなたはほとけさまから おあずかりした子ども。ほとけさまの子どもです。」

だから わたしは なんの不自由もなく 家のまわりをあそびあっていた。

そのわたしのあとを 元氣にとびはねながらついでくるのは わたしのけらい。それは 白い小犬。

道ばたで 足にけがをしてないたのを ひろってきたのだ。

すこし足をひきずるが、すっかりわたしになれてどこへでもついでくる。

「さあ どっちが早いかな ああ池まできょうそうしよう。」

といって わたしが走り出すと その言葉がわかったように いっしょにかけ出す。

いきをはずませながら 池にたどりつくと わたしは ぼんぼんと手をたたく。

ざわざわ水面が動いたかとおもうと 大きいのやら 小さいのやら たくさんの鯉が顔を見せる。

「きょうは ないんだ。ごめんよ。」

ばくばくと口をあけながら、こっちへよってくる鯉をみながら、わたしは 手をたたいてしまったことを どうかいした。

いつもなら 自分の食べる分を すこしのこして持ってきてやるのだが、なにしろ この夏は ひどい日照りである。

このままでは お米や作物が取れるかどうか。

池のまわりの田や畑は まだあおあおとしているが、ちょっとはなれた田の稲は 真夏の太陽の下で しおれかけている。土は 白くかわいている。

山と山にはさまれて けっして広いとはいえないこの 美作(みまさか)の国。例年ならば 中国山脈から吹きおろしてくる風につて 稲の穂が波うっているはずなのに。

空をわたる鳥たちも げんきがない。

このまま雨が降らなかったら どうなるのであろう。それから先のことは、わたしには まったくわからなかったが、なんとなくおそろしいことが おこるような気がした。

「あーっ」

いっしゅん わたしは 自分のからだ下が下の方へおちてゆくようにおもった。

遠くで 犬がほえたてる声をきいたようである。

人々の声で わたしは 気がついた。

いつのまにか 自分の家の座敷に ねかされている。しんばいそうに わたしの顔をのぞきこんでいる母。

わたしが 目をあけたので ホッとしている。

その母が 話をしてくれたところによると わたしは池へおちたのだ。日照りで水がすくなかったのが幸いして 深く沈まなかった。

近くを通りかかった百姓が 犬があまりにけたたましくなっているの で 池のそばへいって見ると 頭が浮い

ている。急いで引き上げて 家へはこんでくれたのだった。

「よかったわ わたしの大切な子。大事な大事なほとけさまの子。」

母は わたしにほほずりしながら いうのだった。

それから 四、五日して すっかり元気になった わたしは 前から気になっていたことを 母にたずねた。

「あの犬は どうしていますか。」

いつもならば 庭でわたしをまわっていてくれるはずの小犬の姿がみえない。

「それが——」

母は とてもいいにくそうに 口をつぐんだ。

「あの犬が どうしたの。」

わたしは 母の顔をのぞきこむようにして たずねた。

母は 目をふせると しかたがないというふうに話すのだった。

「けさ 静かに死んだのよ。二、三日前から 急にものを食べなくなつて。箱の中へ わらをひいてねかせてあげたら とても うれしそうにして。目をつぶると そ

のまま。」

その言葉をきいて、どつとあふれてくる涙をこらえながら、わたしはいった。

「かわいそうなことをしてしまった。わたしのいのちをすくってくれたのに、かんびょうしてやることも、さいごを見てやることもできなかった。せめて、けがをしていた足だけでも、なでてやりたかった。あんなに楽しそうに、とびはねていたのに。さびしかっただろうな。ごめんよ、ごめんよ。」

にぎっていた母の手に、涙がこぼれおちた。

「わたしは、どうしたら、いいのでしょうか。なにをしてやったらいいのでしょうか——」

その時である。

「たいへんでございます。漆間さまにもうしあげます。どうぞ、お取りつきくださいませ。」

砂ぼこりを立てながら、門の中へ走りこんできた若い男は、近所の百姓である。

庭へ手をついて、頭をさげているその背中、ハアハアとなみをうっている。

父が、縁がわに立つと、いくらか息のしずまった男がいった。

「漆間さまも、ご心配なさっておられる通り、ため池の水も、日ましに少くなつて、せつかくの稲も、毎日かれています。わたしたち百姓にとって、それを見るのは、わが子を取られるように、つらいことでございます。そのつらさを、一日でも二日でも先へのぼしたい一心で、ため池の水を、村人はみんなして、たいせつに使つてまわりました。それがでございます。それが……。」

いつてきの水もございません。すこしの水も。

ゆうべ、となり村の者が、この村のため池の水門を勝手にあけて、自分たちの田へ水を流してしまつて……」言葉をつまらせた百姓は、そのまま、ワァーツと泣きふしてしまつた。

それを聞いて、わたしが、すぐに思ひうかべたのは、あの池の鯉であつた。

水のなくなつていく池の底の鯉。

泥の中で、もがきながら、いつかきつと水を入れてく

れるだろう、そうして 手をたたいてくれるだろうとおもっていたにちがいない。うらめしく おもったにちがいない。

でもなんにも してやることができなかった。

わたしは かなしかった。

その気持は 縁がわに立ちつくしている父も同じであっただろう。

父は 日ごろから「ものは大事にせよ すべてのものが ほとけさまからの おあずかりものだから」と村人たちにおしえていたので、他の村のため池の水がなくなっても 漆間の池には まだ水があったのだ。困った他の村の武士が 父のところへ話し合いにきた。

つねづね「だれもがみんな ほとけさまの子ども」といっている父であったから 困っている人は だれでも同じように 助けてあげたかったのだ。また そうしなかったら うそつきになる。

だからといって 村人たちが 一生懸命せつやくしてためた大切な水を ほかの村へわけてあげてしまつてそれでもまだ雨がふらなかつたら どうなるだろう。

自分たちの食べものさえなくなつて きっと死ぬ人がある。

病人や老人 子どもが さきに死ぬ。

それは どっちかが死ぬ世界。どちらかが けおとされ ふんずけられて ぼろぼろになり すてられる。

「ぼくのだよ」「いや わたしのよ」といいあらそい「こまつたね」「どうしたら いいんだろう」とおそろなき出す世界。

小犬や 池の鯉とあそんだ楽しいこともあったけれど それは ほんのわずかな時であった。

立ったままの父、そのうしろで 手を取り合っている母とわたし。

いましも 赤く焼けた西の空を ふたつの宇宙船がとおざかる。

宇宙船「小犬号」と「鯉号」だ。

父と母とわたしは 手をあわせる。

(つづく)



念仏するもの



梅 うめ
辻 つじ
昭 しょう
音 おん

(京都市東山区隆彦院住職)

○

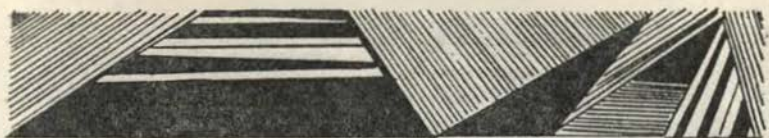
やがて二十一世紀を迎えようとする今日、四十億の人の棲むこの地球上には、いろいろの宗教があり、さまざまな信仰があるようです。私ども念仏者は如何なる因縁あつてか、二千年の昔、印度の釈尊の悟りによって開かれた教えが、三国に伝承され、東洋の文化の基となった世界宗教の一つである仏教に、幸いも今日を生きているのです。しかもわが宗祖法然上人によって、広汎な仏教を、六字の名号に結実された念仏の中に生活しています。人間にはさまざまな生き様があります。私がいま、生かされている念仏は仏教思想のどのようなところなのか、仏教と念仏と生活のつながりをふりかえって、念仏の信仰に生かされる喜びを深めたいのです。仏法多しといえども、その教えるところは「空」の思想を説くものだといわれます。釈尊の



教えが、印度、中国、日本と伝承されてきた成果としての八万四千の法門も、尽きるところは「空・無我」の思想におさまるのです。その代表的經典として『般若経』が挙げられます。『般若経』は大般若といわれ、六百巻の多くを教える經典であります。その最も凝縮されたものが、『般若心経』であり、言い換えれば『般若心経』が仏教の教理を代表する經典なのであります。

しからば『般若心経』にはどんなことを説くのでしょうか。『般若心経』は、「般若波羅蜜多心経」とその名の示すように、般若の智慧によって彼岸に到ることを説くお経であります。「般若の智慧」、それは色即是空、空即是色の命題としてもとりあげられる空の世界、般若の世界といえましょう。

『心経』には色即是空、空即是色の空の思想を説くのに、それをささえる「無」の思想を説いております。「無色無受想行識無眼耳鼻舌身意無色……無苦集滅道無智亦無得」と説くところは、すべて無におさめ、ものに執着することを否定し、ものにとらわれない「無」の思想をとくところでもあります。とらわれない心によって心の平静が保たれ、ものの真価がつかめることをいっているのでありましょう。それ故に、つづいて「無所得の故に人は菩薩の般若波羅蜜多に帰依せば、心に遮障なくして遊行することを得べし、心に遮障なきが故に、恐怖せず、顛倒を超絶して究竟の涅槃を得べし」と説いているのです。「仏教は無我にて候」と、仏教を「無我」の一語に信解した先徳があったことを思いだしますが、『大般若経』をもって仏教の思想が代表され、その肝要が『般若心経』であれば、『般若心経』の説く「無」の思想に仏教の肝要もおさまるといわれましょう。



私が今、『般若心経』が仏教を代表する思想を説く經典であることに着目し、それを強調しますのは、念仏によって『心経』の説く無の境地、すべてが無におさまる『心経』、即ち無我の境地に到達することができるということに気づかされたからです。念仏を無心に申す時は無も清浄になっていくのです。私の若かりし頃、「念仏を申せ」「念仏を申せ」とこの言葉をよく耳にしたものです。一体念仏を申したらどうなるか、なぜ念仏を申したらよいのか、ただ「申せ、申せといっても」と若気のいたらなさと、先達の教えられる事が充分理解できなかった事があります。「仏の本願だから」「選択された念仏だから」と言われても、本当に実感として信解するところまではなかなか及びませんでした。勿論法然上人は、『一枚起請文』に、「智者達の申さるる観念の念にもあらず、学問をして念の心をさとりて申す念仏にもあらず」と申しておられますが、今、私のいう念仏を申すことへの疑問は上人の申される程の観念の念でもなく、「念の心をさとりて云々」という大それた疑問でもありません。念仏する基本的立場の問題であり、念仏信仰の基盤の問題であります。私自身において、念仏を申すことによつて心の状態がどうなるのか、心境にどのような変化があるのか、身近かに理解もできなかったし、心解、体得は及びもつかぬことでありました。いわば、中身の無い概念だけの念仏、形式的な念仏の理解であったのです。念仏と仏教、仏教と生活の結びつきについて、自分のものとして充分につかみえない、納得のいかない部分があったわけです。今頃ようやく、私なりに念仏の尊さが味わえ、仏教と念仏の私達の生活への影響が理解されようとしているのです。



念仏は申すものをして、仏教を支える無我の心境に歩一歩と前進せしめ、身も心をも淨化し、一声一念ごとに心の塵を洗い落とすのです。そして念仏の相続は世間の雜念を遠離するのです。無我への接近と思われるのです。念仏を申すその利那は何のとらわれもない無我そのものの、ただ口に南無阿弥陀仏と称え、心に阿弥陀仏を念ずるだけなのです。

南無阿弥陀仏とは、阿弥陀仏に帰命するということでもあります。阿弥陀仏は、光寿二無量をそなえた覚者であります。南無阿弥陀仏は無量の生命と無限な智慧をもった仏に帰依することです。阿弥陀仏の阿弥陀は無量を意味し、分別の世界では量りきれないということです。分別の世界を越えた量りきれない世界、即ち無分別の世界を悟った者に帰命するのが、南無阿弥陀仏なのです。計量の無い世界、無の次元に帰命するのが念仏なのではないでしょうか。その世界を念じ覚者への帰命を口にするのが、口称念仏であります。覚者への帰命を口に称え相続する姿勢は妄我の心境です。口称念仏の姿は、内外共に無我の境涯であります。この姿が般若の「無」の次元に直結するわけです。

口称念仏がただ死後の往生のためだけのものでは、念仏が「無」に直結することをそれ程とりあげなくてもよいのであります。しかし今、この世に生きていく時、念仏が人間の生き様を左右するきめ手であることに気付けば、これを離れては生きられない思いです。私の生き様は、阿弥陀仏を願う真実の叫びの相続であってほしいものです。それでこそ仏教に生き、生かされた生活といえましょう。日々の生活の一挙手一投足が、念仏による無我的態度から判断されたものであり、行動であれば、それは何ものにもとらわれない平和そのものの生き様といえましょう。そこにこそ念仏が仏教となる所以をみるのです。

『般若心経』の初めに「観自在菩薩 行深般若波羅蜜多……」とあって、般若波羅蜜の行を



をあげています。般若の智慧を行ずることによって色即是空の世界が開けるといいます。仏教には種々の教法があります。それに到る行法も種々あります。各宗各様の行が教法に相応して説かれています。法然上人は念仏の一行を選択されたのであります。念仏は時、処をえらばず、いつでもどこでもだれでもが行ぜられる行なのです。どんなに高尚な行であっても、人・処・時をえらんで平等の仏の大慈悲の理念に矛盾します。全人類が仏の慈悲に浴されるからこそ、仏教が世界の宗教といえるのであります。念仏はどんな時でも、だれにでも、どこでも、行を行ずることができます。



現今、日本の仏教界及び欧米國に普遍している禪が仏教を代表するものと考えている一部の人もあるようです。禪はいつ、どこ、だれにも行ぜられるとは言えないのではないのでしょうか。念仏は各人各様にいつ、どこでも行ぜられ、六字の名号を称えるだけで深遠な仏教の真髄にふれ、「無」の境地に直行することができるのです。法然上人の威大さをひしひしと感ずる今日であります。念仏門にある身を喜ばずにはられないのです。

仏教はただ信解に終つては仏教が全うされません。口称することによって口称をこえた念仏生活こそまことの念仏者でありましょう。あるべきようにあってこそ念仏に生きる人といえましょう。それでこそ念仏によって無我的次元の行が行ぜられたことになるわけです。

称名念仏の中に深遠な仏法がおさまリ、念仏が行中の行である確信を得た今日、「生けらば念仏の功を積み死なば浄土に参りなん、とてもかくてもこの身には思ひわづらうことぞなし」といわれた法然上人のご心境に少しは近づいた思いがするのです。

◎『浄土』表紙版画絵販売についての案内

『浄土』誌の遅配が続いており、まことに申し訳ありません。

どうか今後ともまた、『浄土』誌の充実のために、会員諸兄の皆さまの暖かいご支援とご高配を心よりお願い申し上げます。

好評の『浄土』誌表紙版画絵は、大西耕三先生のご好意を得て、豪華額縁に装丁して販売させていただいております。額縁代も含めて、金二五〇〇円というお求めやすいお値段で、季節観に溢れた芸術味豊かな版画掛物が購入できるわけです。どうぞ振替にてご注文願えれば幸いです。

また、大きな方は、『浄土』表紙絵よりはずっと大きく、約20cm×30cm位の大きさですが、額縁の大きさでいえば30cm×50cm程の大変豪華な一幅となります。

なお限定販売のため、予定数に達しましたら、申し訳ありませんが、おことわりさせていただきます。しかし現在のところ、昨年度の分、九月号から十二月号までの在庫も充分にありますので、ふるってご注文願えば幸いです。

(申し込み先) 〒102 東京都千代田区飯田橋一―一―六

法 然 上 人 鑽 仰 会 振 替 (東 京) 八 八 二 一 八 七

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

インド文学の香り……『バーガヴァタ・プラーナ』抄訳（Ⅱ）



地獄について

小山典勇

王は質問する。

世間の人々の多様なありさまは何故であるか。

聖仙は答える。

三つの根本的性質に従って、また信仰によって、人の行為の道は別々である。実に一切は、一切の程度に依じて存在する。

さて禁止された内容の特徴とする非法を行う者にとって、信仰によって差異があるから、行為の果も一様でない。無始よりの無明によって欲望をおこす人々にとってそれが転変の特徴とすることは、千もの道として現われていることである。それらについては詳しく話そう。

王は言う。

師よ、ナラカ(地獄)という特別な地域があるのですか。三界の外に、又は中間に。

聖仙は語る。

それは三界の中間、南方で、地より下、水より上にあ
る。そこではアグニシュヴァータなどの祖霊が、最勝の
三昧によって、各自の家系の幸福を願って住んでいる。
またそこでは、祖霊の王、至高なる、ヤマ神が家来と
ともに住し、家来がその国に連れて来た死者に対して、
欠点、過失などの行為に応じて罰を課す。彼こそ犯しが
たい至高の教令を有する者である。

そこには一、あるいは二十一のナラカがあるという。

それらを、名前、形、特徴に従い数えあげよう。

この世で他人の財・子孫・妻を奪う人は、大変恐ろし
いヤマ神の家来によって、時という縄で結ばれ、ターミ
スラというナラカに力づくで落される。そこでは食べる
ことも水を飲むことも出来ないし、刑杖で打たれること
叱責などの責苦に苦しめられ、人々は落胆し、気絶して
ターミスラを主とするナラカに至る。

アンダターミスラでは次のようである。人を欺いて、
その妻を享楽する時、ここに落され、責苦をうける。苦

痛によって意識を失い視力を失う。まるで森の木が根よ
り切り倒されるように。そこでこれをアンダターミスラ
という。

あるいは、「それは私である」「これは私のもの」とい
って、生類を害することによってのみで、自分の家族を
養う人は、ここでは家族を放棄し、自身はその不正直に
よってラウラバに落ちる。

この世で、彼に害された生類は、かの世でルルとなっ
て、ヤマ神の責苦をうける彼を害する。それでここをラ
ウラバという。ルルとは蛇よりも恐ろしい存在の名であ
る。

マハーラウラバも同様である。ここに落ちた人をクラ
ヴィヤードともいうルルが、ただ自身の肉体を養うのみ
であった人を、(その人の)肉を食うことによっていため
苦しめる。

獣や鳥を生きたままで傷害する凶悪なもの、食人鬼に
よってさえ非難される無慈悲なものを、かの世でヤマ神
の家来が、クンビーバーカで、熱した油で責める。

この世で、父母・賢者・バラモンを殺害する人は、カ
ーラストラに入れられる。一万ヨージャナの球状をし

た、銅より成る、灼熱の場で、上下から太陽・火によって熱せられているナラカである。そして飢渴の苦によって、身体の内も外も焼かれつつ、獣の毛の数ほど、千年ほども、(責苦の中で) 坐り、臥し、動き、止まり、走り回る。

この世で、苦難の時でないのに、自分のヴェーダ聖典に教えられた道から退き、そして外道に近づいた人を、アシバトラバナに入れ、むちで打つ。彼はあちらこちらを走りつつ、両側から鋭い先端の、ターラバナの剣の葉で身体中を切断され、「オーノ私は死ぬ。」と叫んで、最高の苦痛に、意識を失い、一步毎に倒れる。自己の義務を破る人は、外道に従う結果を享受する。

この世で、王あるいは王の家来が、処罰しなくてよい人を処罰し、またバラモンに体罰を与えるなら、この一段と罪深いものは、このスーカラムッカに落ちる。そこであたかも、さつまいものかたまりが微塵にされるように、力づくで身体を微塵にされる。責苦の悲鳴によって声をあげつつ意識を失う。あたかもこの世で、まだ過失を経験したことのない人が、幽閉されて落胆するよう

この世で、盗みにより、または力づくで、バラモンなどの黄金・宝石を奪う。あるいは逆境でもない時に他人のものを奪う。これらの人を、かの世で、ヤマ神の家来が、鉄より成る火のかたまりと釘抜きによって、皮膚を害する。

この世で、証言、物の交換、施こしの時に、嘘を言う人は死後、アビーチマツトというナラカに、頭を下にして、百ヨージャナの高さの山頂から落される。アビーチマツトの地表は岩石の表面にある水のように波がなくみえる。彼はごまつぶのように身体をこなごなにされてもお死なないで、再び(山頂に) 上げられ、落される。

この世で、バラモン、王、ヴァイシャあるいはその妻などが、ソーマ酒を飲むなら、あるいは警戒中の者がスラー酒を飲むなら、酩酊の故に、ニラヤに導かれる。彼等の胸を足でふみつけ、火にとかされた黒い鉄を意

この世で、家長が客や招待しないのにやって来たもの(乞食の修行者)を、しばしば怒りを生じて、焼き殺してしまおうと願うかのように、邪悪なまなざしで見えるなら、ニラヤにおいて、この邪悪なまなざしをした人の両

眼を金剛のようなくちばしをもつ鷲、あおさぎ、鳥、ヴァタ鳥などが襲つて、むりやりついばむ。

この世で、富に慢心し、自惚れ、(ものごとをすねて)ななめにみる、一切を恐れ、財産の消滅を気づかつて心や顔がひからびて満足を得られない人は、あたかも富の神のように財を守る。彼は死後、この財を生じ、消費し守る時の過失を得て、スーチームッカというナラカに落ちる。そこで、富を獲得した邪悪な人を、ヤマ神の家来は、織物師が織るように、彼の肢体をあらゆるところから織る。

ヤマ神の住所には、このようなナラカが百も千もある。それらすべてのナラカに、今述べた非法を行うものはだれであれ、また今述べなかった人も、順々に落ち入る。同様に正しい法を実践する人もまた、再びここに生まれる時には、(善悪)一二つの行為の果によって落ち入る。

〈第五卷二十六章〉

〔解説〕

私たちの行う行為がどんな結果をもたらすかについて一つ一つの事例が示されている。地獄をもたらす行為は欲望にもとづき、他人を傷つけるものである。このような人々、社会には幸福も平和もないであらう。欲望のままに自分本位で生きることが、自分にも他人にも決して満足できるものではないことが、常に注意されてきたことが、今回とりあげたような文脈であらう。

現代人の眼には、これらの事例は理解しにくく、また地獄についても疑問があると思われる。しかし私たちの行為が時に人を傷つけ、苦しめる結果になることは、結論し承知していることであらう。

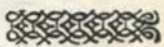
そもそもこの「行為とその果」の考え方は、善い行為は、果が楽しく、悪い行為は果が苦しいという素朴な考え方であって、古代インド一般に承認されていた。

現代社会の複雑多様な人間関係の中で、私たちに改めて一挙手一投足の行為にまで反省を求め、かつ積極的な生き方を問うものと考えられないであらうか。

浄土句集



一田牛畝選



花曇り竿竹売りの声はずむ
東京 原 登起子

福岡 行正 明弘

花追ふて祖蹟行脚の七十里

群馬 島津 か寿

風無きに牡丹崩るゝ昼下り

評 今年法然上人の御誕生八百五十年に
なりますので、岡山県の誕生寺より御往

評 昼下りとなれば咲き切った牡丹に陽差
しも強く風もつゝのるならん。咲き満ちた

花弁も自然に力を失い崩れる。

母の忌や母の好みし豆の飯
福岡 荒牧 木魚

子を抱いて安産参りの藤の寺
福岡 高良 慈風

評 浄土宗二祖鎮西国師の母は産後直ちに
亡くなられたので、国師は母追善の為に

肌帯をしめられた如來を刻み安産の守護
の仏とされた。安産祈願の寺として有名

で、御礼参りの人は授けた子を抱いてい
る。境内の藤は満開である。

評 母の忌を迎えた。母は何よりも豆飯が
好きだった。好きだったものを供えるの

が、仏は一番よろこばれるに違いない。

京の花浪華の花と巡る幸
福岡 原 敬二郎

春の日の石段ゆるき無人駅
福岡 安藤平次郎

評 開眼された地藏尊は、微笑み在于すので
ある。花吹雪はしきりである。その風に

沢山の水車もまわっているのである。水子

東京 真野 竜

開眼の地藏微笑む花吹雪

評 開眼された地藏尊は、微笑み在于すので

ある。花吹雪はしきりである。その風に

沢山の水車もまわっているのである。水子

里は花山路は雪の旅となり
福岡 植藤みきる

九十九峰見えて雲雀野果しなく
福岡 服部 光代

ご満座の花の御廟に詣でけり
大分 丹波 難中

青空に風船飛ばし卒業す
東京 細田 初枝

風わたる城下の稲穂さら／＼と
三重 森 静枝

そゝがれて目に沁む顔や甘茶仏
福岡 行正一如子

草餅を供へまつれる地藏尊
東京 新井 新生

お彼岸の墓参の人等語り行く
山口 上野 明達

齋すみて法座待つ間や御忌の鐘
福岡 前田 秀峰

青嵐十ヶ寺十里札所径
東京 猪瀬 幸子

盃さづきにひとひら浮ける花の宴
三重 山田 うた

花の道行脚満行の僧の列
福岡 永江 隆説

花葉濃彩鮮やかに美しく
東京 真野よし子

草引けば長き根のあり指痛む
東京 満尾夜有子

虚子堂に虚子追善の護念経
福岡 沢河野ねはん

原宿の椿芽きに染り行く
東京 田中 秀代

幼友話おともなごつきせぬ春の夜
東京 末常てる子

蹟あときて雲雀の行方見失ふ
福岡 林 澄山

柏餅墨色淡き父の文
東京 吉田ゆきあ

花便り嬉しき今朝の雨静か
東京 小笠原香祥

大いなる柚きのお握り山笑ふ
福岡 山崎 江舟

亡き母の面影今も春炬燵
福岡 上滝津弥音

緋衣の僧金襴袈裟かけ春日影
東京 鈴木 葉子
金魚埋め石置きまつる死刑囚 一田 牛畝

①読②者③の④へ⑤一⑥ジ

…短 篇…

「草むしり」



山^{やま}中^{なか}はじめ

(神奈川県川崎市在住)

「順一、きょうこそは草むしりをしてちょうだいね」

ラジオ体操から帰り、朝食の膳についたほくに母がいった。

「だめだよ、きょうは○○ちゃんとプールへ行こうと思

ってるんだから」

「だめ、順一はいつもそんなこといって逃げてるんだから、きょうは絶対に逃がしませんからね」

「だって……」

「いいわよ、いやだっていうんならお母さんにも考えがあるから。来週から順一はキャンプに行くんでしょ」にやりとしながら母はいった。

夏が来るたびに、ぼくは必ずこの母との会話を思い出し、またその一日が想い浮んでくる。

たしか小学校の二年生だった。ぼくは、燦々（さんざん）と輝く太陽の下で、一日中泣きながら草むしりをした。

なぜ泣いたのか。

それは今でもはっきりとおぼえている。べつにぼくが泣き虫少年だったわけではない。ひとつには、母の出した交換条件にしたがわざるをえなかった自分が情けなかったことと、またひとつに、ぼくは草むしりが大嫌いだったからだ。もちろん、草むしりは今でも嫌いである。なにが嫌いだといって、ぼくは草むしりと煮魚ほど嫌いなものはない。

大嫌いなことをしなければならぬうちに、純真な少

年の心を傷つけるような、あの母の狡猾ないいまわし。どんな少年でも泣かすにはいられたかったろう。

ぼくは、食事をしながら「そういういい方はずるい」と、母の出す条件に必死な抵抗を試みた。しかし、幼ないぼくの抵抗など、鬼の化身となった母にはなんの抗力もなかった。そこには、経済を握る者と、なんの経済力もない者との差が歴然とあらわれていた。負けである。食事が終ると、ぼくはふくれっ面をして庭へおりた。二十坪ほどの庭で、その半分ぐらいが母の愛する花壇となっている。

ぼくは、小さな手にぶかぶかの軍手をはめると、それを輪ゴムでとめ、シャベルを持って花壇に入った。草花や土の甘い香がブーンと鼻に匂った。

グサッ／＼ ぼくはシャベルを目についた雑草の根元に突き刺した。そして「オニババア」といいながらその雑草を引き抜いた。

「順一、そんな真中からしないで、もっと端から順々にしていったほうがいいよ。それから帽子を被ってちょうだい。順一のいい頭がくるくるバーになったら、お母さんこまっちゃうから」

母は麦藁帽子を持って縁側に立っていた。やさしい
つもの顔で微笑んでいた。

ぼくは、黙って帽子を受けとった。母の微笑が無性に
くやしかった。勝利者が敗者にかける憐憫のように思え
たのだ。ぼくは帽子を深く被り涙をかくして花壇へ戻っ
た。そして、母にいわれたとおり花壇の端から草むしり
を始めた。涙はとめどなく頬を濡らしていた。

先にも書いたが、ぼくは草むしりが大嫌いだ。

なぜ嫌いなのか。

草むしりという行為そのものの嫌いなことは、世の人
人も同じだと思うが、ぼくはその上に草に触れることが
嫌いなのである。見ているかぎりにおいてはなんとも思
わないが、触れるとなると背筋をゾツとしたものが走
る。野山を活発に走り回った子どもだったが、素手で草
をつかむことはほとんどしなかった。

草のなにかそんなに嫌なのか、というと、葉や茎の表
面にあるあの薄っすらとした産毛のようなものに触れる
のがたまらなく嫌なのである。これが陽光に浮き出て見
えたりする時など、気味が悪くてしょうがない。そして
また、似たようなことだが、白人女性——特に金髪の女

性——によくある、あの金色の長い産毛もぼくは苦手で
ある。なぜ嫌いなのかはわからないが、とにかく嫌いな
のである。

ぼくのこんな気持を母は知るよしもない。庭の隅っこ
で小さくうずくまりながら恐怖とたたかっているぼくの
姿を、母は頼まれた縫いものをしながらうれしそうな顔
で見ている。

ぼくは、自分の嫌いなことやものをあまり母にいわな
いようにしている。——いわなくても母にはすぐわかっ
てしまいうらしいが……、いえば大変なことになる。
食べものにしていえば、それが毎日出てくる。親として
の愛もなにもあったものではない。「お百姓さんがいっ
しょうけんめい作ってくれたものを、嫌いだとかまずい
などというんじゃありません」と、それこそ鬼のような
顔でいう。今でこそ、ありがたいことを教えてくれたと
思うが、当時のぼくは「こんなまずいものをなぜ作るん
だろう」と、母の鬼のような顔を見ながら思うのだった。

だから草むしりも決して嫌いだとはいわなかった。い
ったりしたらそれこそ、花の夏休みを毎日草むしりして

過さねばならなかったろう。そのくらい平気でやらせる母である。

「このやろう、二度と生えてこれないように根こそぎ引っこ抜いてやる」

ぼくは、こんなことを口走りながら花壇の中をはいずり回った。

途中、陽が高くなった時に、母は「残りは明日にしようはもうやめなさい」といったが、ぼくは「きょう中に終わらせるんだ」といって花壇から出なかった。こんなこと明日もやらされてたまるか、という気持と、母に対する怒りがおさまってなかったからだ。ぼくは、草むしりをしながら、母の大切にしているバラを切つてやる、という衝動に何度もかられていた。しかし、そんなことをしたら、それこそ逆上した母がどんな報復手段に出るか、子ども心にも容易に想像することができた。

夕方になって、縫ものの終った母が庭におりてきた。「きょう中に終わらせる」といったぼくを手伝うためだ。

残りはまだかなりあった。見るに見兼ねたのかもしれない。花壇に入った母は、素手で雑草をちよいちと抜いていく。慣れた手つきでとても上手だった。ぼくは、

自分のはいずって来たあとを見返した。シャベルでほじった小さな穴がそこいらじゅうにあいていた。

「順一、こんな小さな草でも命があつて生きているんだよ。だから抜くときには「ごめんなさい」という気持で抜いてやらないとね」

母がぼくの脇まで来た時にいった。

もう二十数年も前のことであつたが、この日のことだけは不思議と忘れない。鬼と化した母の顔、いった言葉、頬が涙で濡れた感じ、土や草花の甘い香り、そしてまた、身体中の汗がザラザラとした塩粒となり、それを母に「舐めてみな」といわれ、舐めた時のしょっぱさ、すべてが鮮明に想い出されてくる。悔しさなど少しもない、懐しい想い出として浮んでくる。

母は、日々の生活の中からぼくに色々なことを教えてくれた。その時は悔しさだけで過ぎていったことも、年を経るにしたがつて、その意味がわかるようになってきた。ありがたいことだ、と内心では思っている。しか

し、この気持を母にいったことはない。母にとって、ぼくは今でもダメな子どもでありつづけ、顔を合われれば小言の雨をあげられているからだ。いわれたぼくも、その時の気持は、あの当時と少しも変わってない。「クソババア」と思うのである。経済的に同じ立場になったので、変な駆引条件は出してこないが、最近では自分の歳を盾にしてものを頼んでくる。そしていうことは「順一は年寄りを少しも大切にしない。あたしはお前の育てかたを間違えたよ」である。こんなことを日々いわれていれば、感謝の気持など、いい出せないのがあたりまえだ。

今年もそろそろ母が草むしりを始める時が近づいた。ぼくは、仕事が早く終ったら手伝ってやろうと思っていいる。しかし、この十数年、母はぼくに草むしりを頼んだことはない。だからぼくもしないでいる。しかし、あの子どもの日を想い出すごとに、いつかまた、母と二人で草むしりをしてみたい、と思うのである。(おわり)

村瀬 秀雄 著

|| 新刊 ||

『全 訳 法然 勅修御伝』

B 6 判 八四七頁 価六八〇〇円

|| 好評 ||

『和 訳 浄土三部経』

B 6 判 四七四頁 価二五〇〇円

『和 訳 法然 上人 撰 択集』

B 6 判 三八七頁 価二五〇〇円

『和 訳 善導 観経四帖疏』

B 6 判 五八四頁 価三五〇〇円

『和 訳 善導 大師 六時礼讃』

B 6 判 二六五頁 価二四〇〇円

取扱い 法然上人鑽仰会



暑
い
一
日

清^{きよ}

川^{かわ}

宗^{そう}

治^じ

汗を流して働く

真夏の太陽は鍊獄の光と熱

忙しさと慌しさが猛火に焼ける

暑い一日――

頭を下げる

腰を曲げる

心が燃える

暑い一日――

夏の暑い炎の一日――

息づかいもせわしく

休むことない生活を続ける

◆◆◆「浄土句集」欄への投句のお願い

―及び俳文等の寄稿のお願い◆◆◆

『浄土』誌本文中のオアシスともいふべき、「浄土句集」欄は、選者であるホトギス同人一田牛畝先生の献身的なご尽力と、あわせて熱心な俳句を愛する会員諸兄に守られて、二ページながら情味と、季節味に富んだ味わい深い俳壇を作っています。心をこめて作句され、熱心にご投句される皆様方へ心から感謝させていただきます。

さて、この「浄土句集」欄へ、どうぞほかの同心の方々もできるだけ多くご投句していただくことをお願いし、また重ねて俳文や句会便り、あるいは俳句にまつわる折々の随想等をご投稿いただくことを、ここに衷心よりお願い申し上げます。

左記要領で、くれぐれも宜しくお願いします。

一、内 容 俳文、句会便り等の随想

一、枚 数 四百字詰用紙八枚半程度

一、締 切 毎月五日

法然上人鑽仰会



念佛ひじり三国志

(平)

一法然をめぐる人々

寺内大吉

挿絵 松濤達文画

一

僧都明遍は瞑目したまま話に聞き入った。一語もさしはさまず、表情、体容をことりと動かさな。だが全神経は、よじれんばかりに張りつめていた。

それほど、住蓮房が語る話の内容は重大だったのである。

一気に語り尽くして住蓮は唇を閉じた。

「罪のすべてを住蓮どのがかぶるというわけか。いや、罪は実在していないのだ。実在しない罪状をこしらえあげて、ひっかぶろうという」

「……」

「容易ならざることだな」

「そこを大相国（頼実）へ吹きこんでもらいたい。卿三位を通じて」

このひじりは、どこから自分と卿三位兼子との間から嗅ぎ出したのであろうか。明遍はその点で迷ってしま

う。
たしかに今日の午後、高倉邸へ招かれて兼子と会っている。誰も知らないことだ。話は安楽房らの逮捕にからんで専修念仏の徒を一網打尽にしようという密談だった。もちろん明遍が打診されたのは、一網打尽にした場合に末端の信者たちが反乱へ暴走するかどうか、その見

通してある。

卿三位兼子は口辺に妖氣をふんだんにたたえ、

「弥陀一身を信心するとは言ってもあの徒輩が信奉しているのは法然ただ一人。専修念仏は法然教です。だから法然を除けば立ちどころに無力化するでしょうし、また蜂起する懸念もあるわけです」

冷静に現状を分析している。

それにしても兼子たちがなぜそこまで法然及び念仏ひじりたちを嫌悪するのだろうか。

明遍なりの判断はあった。

宗教上の問題ではなかった。政治である。鎌倉の武士たちに強く支持されている法然教団。これを覆滅させれば北条勢力はこの都で足場を失う。すくなくとも全国規模の政治性が退色して、ローカルの武人集団に収縮してしまうであろう。そこが源氏という家柄を背景にした將軍頼朝と北条執権との差でもあった。北条一族では配下の武士以外に大衆とのつながりがなかった。源氏には清和源氏という「皇系」や宮廷守護の「家系」があった。

このあたりが後鳥羽院政のねらいであり、その政策に同調してゆくことが兼子夫婦の保身、栄達の唯一の道で

あった。

卿三位兼子が専修教団の本質を適確に見抜いているように、この住蓮の現実把握もまたまっすぐに核心をついてくる。

法然の一身だけを守り抜こうとする。安楽房事件をもふくめてすべてを風俗問題に圧縮したがつている。

「法然ご房へのおぬしの敬愛ぶり、忠誠心はわかるが、ありもしない伊賀局との情事をこしらえあげて、果たして相手の女人が合意するだろうか」

明遍は最もかんじんな点にふれた。

「……」

住蓮は質問の真意を掴みかねる表情だった。

「つまりだな。伊賀局と言えば院が最も愛している人だ。かりにおぬしとの間で密事があったとしても本人は否定するのではないかな。さもないければ彼女自身の立場がおかしくなる」

住蓮はそこでわずかに坐りなおした。

「さよう、お局は必死にわが身のあかしを立てようとするでしょうね。しかし言い分は五分と五分だ」

「五分五分とは？」

「明遍どの。女人との情事には裏の裏までご存じのあなただと思っていましたのに」

明遍は、どきりときた。この男、自分と高階栄子やあ的一条家の姫との情事を知っているのだろうか。

「それはどういふことか」

「一方が情を通じたと主張すれば、相手がどのように釈明しようとも『濡れ衣』かどうか判別はつかぬということですよ」

「うむ……」

「いわんや伊賀局は院の愛妾。男心とは、愛する相手であればあるほど疑うてかかるのではないでしょうか。」

愛と嫉妬は腹背のもの。となれば五分以上になる」

「奇体な話じゃのう」

情交をかわしてもいない相手と、それがあつたことでちあげようというのである。

「すでに捕らえられた安楽房とて同じことだと思う。坊門局と情事があつたとは、到底いいきれない。しかし彼は、あつたと主張したのだから。それが口実となつて」「口実をつけられるのを待ち受けていたわけか……しかし住蓮どの」

明遍はわざと視線を結ばぬようにして言った。

「はい」

「口実をつけられたとしても、あとでその実罪をはらす決定的な証固を出さないと……」

「そんなものは出させぬ」

「それをやらぬとおぬしも安楽房も死罪になるかもしれない」

「……」

「よろしいのかな。院の御気性からすれば、中宮や愛妾を寝取られたとあれば、極刑で臨んできますぞ」

「そうでしようなあ。そういう御政道だ」

「よろしいのか、それでも」

「致し方がありませんまい」

他人事のような突き放した口ぶりである。

「死罪になるのだ」

明遍は反復した。

「致し方がありませんまい」

同じ言葉がかえった。

「密通の嫌疑をかぶって死罪になる。それで仏法者の道が立つのかな」

「仏法者の道が立つかって？ 僧都明遍に今更おこがましいですが、捨身飼虎ですよ」

「捨身飼虎……薩埵太子の話だな」

それは飢えた親虎がわが子を喰ひ殺そうとする。これを見た薩埵太子がわが身を投げ出して虎の餌食となった話である。金光明經に説く。

薩埵太子はこの身を捨てた布施の功德によって兜率天に復活し、正法の伝承となる。悟りを得た覚者——釈尊の前世の姿だったとも言われる。

「いまわたしは正しい仏法を守り抜くために虎の餌食になりたい」

「住蓮どの。おぬしを守り抜きたいのは、正しい仏法と言うよりも法然ご房の一身ではないのか」

明遍のためらいがちな反論を、住蓮はもの静かな笑みで受けとめた。

「その法然こそが正しい仏法なのですよ」

「法然こそが正しい仏法……」

卿三位兼子は専修念仏教団を「法然教団だ」と言いきった。今またその教団に属する住蓮も正しい仏法とは法然そのものだ、と信じこんでいる。

立場こそ正反対だが、両者がとらえる法然像は完全に合致している。

自分だけが違う、と明遍はこれまで一定の間隔を保ちながらどちらかと言えは批判的立場で見つめてきた法然像を、ことあらためて描きなおしてみる。

明遍の批判的立場とは、法然を自分と対等の仏者、いやさ強力なライバルとしてとらえてきたことを意味する。だからこそ法然を正しい仏法の象徴、とは断定しにくいのであった。

一一

住蓮房はすでに明遍が卿三位兼子や後鳥羽院の側近僧都尊長らと通じている事実を知りつくしている。この経路から自分と院の愛妾伊賀局との密通情報を流せ、と頼みこんでくる。

「獅子カ谷で六時礼讃会に一夜を共にしたことだけをお話になればよろしい。それで充分です」

くり返し言って住蓮は光堂を辞去していった。
明遍はいっそう迷った。

自分がこの造られた情事の告発者となることが、いったい何を意味するのか。告発者は、内容の善悪とは無関係で賤しむべき立場へ追いやられねばならない。

思いあまって夜が明けると光堂を出た。足は安居院に向っていた。その房には甥の聖覚がいる。

安居院は現在の大宮寺ノ内あたりにあったらしい。

聖覚は、明遍の兄澄憲の息子である。「黒谷源上人伝」——「十六門記」の作者として知られる。

文暦二年（一二三五）三月五日、六十九歳で入滅するが、その二週ほど前に見舞った藤原定家は、日記「明月記」で、

聖法印安居院局ニ其ノ病ヲ問フ。隆承法印ニ先ツ面謁ス。狼藉便宜ナシト雖モ面謁スベキ由。参ズル本意ノ由、云ヒ出サル。寢所ノ前ニ入ル。遂日無力耗弱、起チ揚ル能ハザル由言談。猶ソノ詞多シ（中略）濁世ノ富樓那遂ニ遷化ノ期ヲナストイヘリ。実ニ是レ道ノ滅亡スルカ。悲シミテ余リ有リ。今年六十九ト云々。先師七十八ノ由ノペラル。碩学能説、今ニ於テ断絶スルカ

病い篤きさまが生々しく描写され、かつ定家ら当時の貴族知識人が澄憲、聖覚父子へ寄せる尊崇の念をうかがい知る文章だ。

もちろんこの建永二年時、聖覚法印は四十歳前後の男盛りであった。

早朝にもかかわらず、すでに二人の先客がいた。上座にすわる体軀逞ましいひじり、黒衣に白頭巾で顔をおおうていたが、明遍にはひと目で正体が見抜けた。蓮生房だ。坂東の荒武者熊谷次郎直実。

かたわらの若いひじりは未知の男だった。

「今この緯空が……」

と聖覚は手書きの巻き物を明遍に示した。

若いひじりが緯空という名であることを知った。後の親鸞である。

巻物を覗きこむと、びっしりと細字が書きつらねてある。

——南無阿弥陀仏、往生之業念仏為先。道緯禪師立聖道浄土二門、而捨聖道正帰浄土之文。安樂集上云、問曰、一切衆生皆有仏性。違劫以来応値多仏、何因

至今仍自輪廻生死不出火宅

「法然上人が主唱する選択本願念仏集です」

聖覚は説明した。

そうした怪文書がひそかに流布されているとは、明遍も兼ねて知っていた。だがじかにその文章にふれたことはない。

怪文書——まさしく体制側の聖道門の僧たちにとって「選択集」は怪文書以外の何ものでもなかった。自分らが信奉し、研鑽してきた仏法を根本から破壊してしまいたいような主張だったからである。

「めったな者には付法しないと聞いたが」

「この緯空は書写を許されたのだ」

聖覚法印の表情に複雑な色が流れている。彼もいまはじめて目にふれたにちがいない。

この数年来、聖覚は法然と接触を深めている。熊谷蓮生房を法然門へ紹介したのも聖覚だったし、また一昨元久二年（一二〇五）の八月には法然が白川二階房で瘧（おこり）の病いに悩んだとき、その病魔退散の導師も聖覚がつとめたほどの仲であった。

にもかかわらず、法然はその宗教思想の核心とも言うべき「選択集」を聖覚に付法しようとはしないのだった。しかもこんな若僧の（当時の親鸞は三十五歳）緯空には書写を許している。

「熊谷どのは？」

明遍は甥の心底を読みぬいて蓮生房に訊いた。

「わしはくり返しこの内容は教えて頂いた。そらんずるほどのので、あえて書写はしなかった」

「そうか……法然ご房は求道を第一とお考えなのだろう」

明遍はわざと聖覚の顔を見ないようにして言った。

「求道第一——」

「さよう、救われたいとひたむきに求めている者には優先して与える。これを批判したり、知識の糧に取りこもうとする者には」

「わたしはその方ですか」

聖覚はやや無然となった。

「それと、おぬしの立場も考えているのではないかな。澄憲僧正の嫡流、三井寺きっての学匠。青蓮院門跡の執事でもあるそなたが、信心も定まらぬのに専修念仏の徒

輩へ加えられてしまったら、身動きがとれなくなる。そればかりか、とんだ迷惑をこうむるかも知れずとお考えになったのではないかな」

明遍は語りながら、今朝この甥を訪ねずにはおれなかった自分の迷いが次第に晴れてきたのを実感した。

そうなのだ。いま覗いた「往生之業念仏為先」こそ法然のすべてではなかったか。ひたむきに求める者には与える。態度があやふやな者は無視する。たとえその者がどんな権威者であろうとも、法然教団にとって利益をもたらす者であろうとも忌避するのである。そこに法然の純粹さがあったのだ。

そんな意味からすれば、自分ら信西入道の一族たちは知識人ではあっても求道者ではなかった。仏典の深部へ分け入っているが、素朴な信心に欠けていたとは言えないか。

法然が聖覚法印をして「吾ガ後ニ念仏往生ノ義スクニイハムスル人ハ、聖覚ト隆覚トナリト」(「明義進修集」)と言わしめたのは、流罪を許されて帰洛したあとのことである。

若い綽空がゆっくりひろげてゆく「選択集」を目読し

ながら、明遍は五体がふるえたすのをおぼえた。

何という大胆な説得、鋭い論旨であろうか。

なるほどこの「選択集」を信じれば、あの住蓮房が「捨身飼虎」したくなるのは当然であろう。

だがこの時点における明遍は未だ後年の「末代ノ機ニハ専修念仏ニシカズ」とまで心境が熟しきっていない。知性の残滓が必死にこの鋭い論旨に抵抗を試みようとしている。

遍執ではなからうか。あまりにも自説に帰一しようとして強引に説きすぎているのではあるまいか。

批判の弁で総括しようとする。

三

「選択集」を読み終えた明遍も聖覚も、そのまま口を閉じてしまった。三井寺の、南都東大寺の名だたる学匠たちとしては軽々しく印象を口にするわけにはいかない。

「明遍どの」

胴間声がひびいた。熊谷蓮生房が呼びかけてきた。

「何ですか」

「僧都は宮廷のことに通じていると思う。近ごろ院は鎌倉調伏を祈禱し、また専修の徒をからめ捕らえたりする。聞けばお上人の首までねらっていると言うではないか」

「さあ……」

「もしもそれが事実だとしたら、この熊谷蓮生が許しませんぞ」

「どう出なさる？」

明遍は白頭巾の内側の眼をうかがった。

「上品上生の往生を遂げてみせるまでじゃ」

「上品上生の往生——」

この荒武者の論理は屈折しすぎていて、とらえにくい。

「いかにも。阿弥陀仏の大慈大悲で救われるのは下品下生。まして末法末世に到っては上品往生はあり得ないと言われる。なまじいにそれを願えば蛇体となって地獄へ堕ちる。だからこの蓮生は、墮地獄を覚悟で上品上生の往生をねらってみせると申すのだ」

「具体的に申すと、それはどういうことですか」

「具体的に申すとか？ それはもはや戦陣の秘となる。

坂東の熊谷一党を呼び寄せ御所へ乱入、院と刺しちがえ

る往生相もあり得るのう」

卿三位兼子たちが最も恐れているのが、そんな暴発であつた。熊谷蓮生房ならやり兼ねない。坂東の熊谷一族にはそれだけの武力もある。

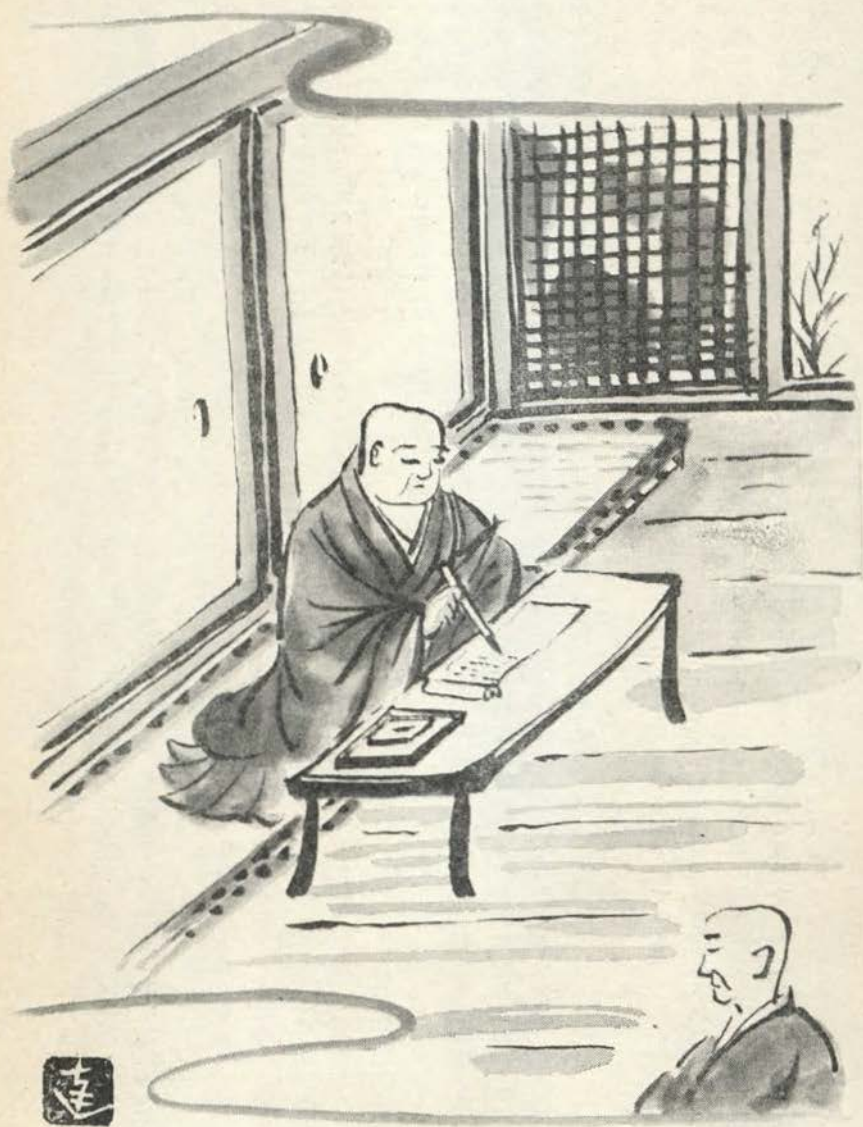
「その折はわたしにも弓矢を取りますぞ」

決然と同調してきたのは若い練空であつた。専修一向の若者集団にしても糾合すれば武闘に耐え得る力は保有していたであらう。

親鸞がこの建永の法難時、かなり過激な対応の姿勢を用意していた事實は、後年に書いた「教行信証」の激越な序文からもうかがえるであらう。

主上、臣下法ニソムキ義ニ違シ、怠(いかり)ヲ成シ怨ミヲ結ブ。玆ニ因テ真宗興隆ノ太祖源空法師ナラビニ門徒数輩罪科ヲ考エズ、ミダリガマシク死罪ニ坐ス。或ハ僧儀ヲ改メテ姓名ヲ賜フテ遠流ニ処ス。予ハ其ノ一ナリ。シカレバステニ僧ニ非ズ俗ニ非ズ。是ノ故ニ禿(とく)ノ字ヲ以テ姓トナス。空師ナラビニ弟子等諸方ノ辺州ニ坐シテ五年ノ居緒ヲ経タリキ

〈上人然法〉



それでも法然の身が死罪一等をまぬかれたからこそ親鸞は黙々と越後へ流されていったのであろう。法然が安楽が住蓮と同一の運命に見舞われていたら、どうだったであろうか。

ところでその親鸞の越後流罪だが、専修教団内でそれほど重要なポストを占めていなかった彼が、なぜ流されたのか（公的史料にはその記載がない）。史家たちが古来困惑する点である。

あるいは妻帯女犯を罪科の理由にあげる説もある。

しかしすでに叡山を脱出し、在俗のひじりとなっていた親鸞に今さら女犯の罪でもあるまい。

あるいは罪されぬのに、自身で勝手に越後へ流れていった、とやや軽侮の念をふくめた憶測もある。

そうだとしたら越後へなぞおもむかず「この師なら、だまされて地獄へ堕ちようとも」と絶対の憑依をささげている法然に同行して讃岐へ向ったはずである。

やはり司直の手で流罪の決定をみたのは事実であろう。ではその罪科は何か。

事件の渦中で、ある種の暴発、狂燥行為があつて、そ

れを咎められたと推理するのが妥当ではあるまいか。

あの法難時、多くの念仏ひじりたちが逮捕され拷問を受けているが、親鸞にはそこまでの体験はなかったらしい。

念仏停止の命令が出ても公然と大衆を動員し示威的な結集をこころみたとする。そのリーダーは当然重罪に処せられるであろう。親鸞がそこあたりでマークされ、追放のうき目をみたと考えたい。と同時に彼自身の側にも暴発、反乱の「未出の犯意」が潜在したのは間違いない。

もう一人、熊谷蓮生房の立場や動向も微妙である。微妙と言ったのはあの法難時、彼は何をしていたのだろう。沈黙を守ったきりでその影すら捜査線上にあらわれてこないのである。

親鸞に比べて蓮生房の教団内における地位は高い。地位、というよりもその著名度である。

昭和三十七年に奈良興善寺から発見された法然の書状でもその点は明白だ。門弟の正行房が念仏結集を計画し、そこへ熊谷蓮生房の来会を法然に頼みこんだ返事なのである。蓮生房が大衆動員の「表看板」となっていた

事実を物語っている。

それほどの蓮生房が、沈黙していればいるで、なぜ罪に連座しなかったのであろうか。

表裏の二面から推理が可能となる。

表面は熊谷が風俗事件と全く無縁だったために不問に付したということ。

これは同時に事件を「女犯」だけに絞って收拾した事実を裏付けている。

裏面の推理は、熊谷にまで手をふれると事態が容易ならぬ方向へ拡大する恐れがあったということだ。専修念仏者たちによる武装蜂起だ。また蓮生房側にもその可能性が充分にあり得た感触を暗示している。

おそらく体制側の手は法然の死罪を滅じ、熊谷をなだめる工作にまわされたとも考えられる。

だからこそ翌年、熊谷蓮生房は東山で「上品上生の往生」を公開するのである。決行は九月に延引したが、とにかく決行した。親鸞同様に彼の内心に渦巻く憤懣が、たとえ地獄へ堕ちても上品上生を、という気分には追いこまれたのであろう。

いかにも荒武者熊谷らしい行動ではないか。静かに坐

して阿弥陀仏の慈悲救済を待つことは、彼の武士の血が許さなかったようである。

法然が、いやあの横川の源信僧都でさえが末法末世では下品下生の者しか救われぬと公言した浄土の核心を、熊谷は公然と破ったのである。

建永の法難を機に熊谷の心が法然を離れ、一種の分派行動に走って、彼自身がスタンドブレイをやって念教仏団の盟主を位置づけようとした、という非難は全くあたらないことになる。

「何とかする。ご両所の心底はよく読めた。わたしが何とかしてみせる」

思わず明遍は、きおいこんで言いきっていた。

昨夜、住蓮から懇望された收拾策とは別の視座から解決の道を求める決意が、明遍の胸で結ばれたのである。

「何とかするとは例えば……」

若い緯空は喰い下がってきた。上流人間のごま化しにはダメされんぞといった顔つきである。

「法然ご房の一身さえ損われずばそれで良いのである。すでに逮捕された安樂房たちはわからんが」

「……」

緯空は熊谷の方をうかがった。

「法然ご房こそは仏法そのものだ。あのお方を守ることが仏法護持につながる。そうではないのか」

住蓮の論旨をそのまま借用した。

「うむ……」

「ご両所の熱望も、その純粋なお気持も、仏法護持の一点にあって、私利私慾はふくまれていない、とわたしはみた」

明遍は力説した。ここが説得のカンどころである。すぐに甥の聖覚法印をふりむいた。富楼那尊者の再来と言われた彼の助力が欲しかった。

しかし聖覚は放心したように庭先へ視線を流しているばかりで、明遍に反応しようとしなかった。

幸いに若い緯空が敏感に反応してくれた。

仏法護持の一念、というテーゼに感動したのである。彼は多くの言葉を費して、法然聖人こそは仏法の象徴。彼をおかすことは仏法に泥塗ることだとくり返し力説した。

熊谷と緯空の兩人にくれぐれも暴発をたしなめて、立ち去る彼らを扉口で見送った。

やっと甥の聖覚法印と水入らずになった。

こんどは聖覚の方から声をかけてきた。

「明遍どのは、どうなさるおつもりで」

「どうなさると申しても取りあえず今日、卿三位に会って来ようと思う」

「ああ、あの方にですか」

聖覚の口もとが複雑にゆがんだ。

(くぐく)

△幼児用▽ 教育えほん

『ほうねんさま』

B5判、表紙共一二ページ(カラー刷)

定価三〇〇円(送料実費)

申込先――

〒102 東京都千代田区飯田橋一―十二―六

大 道 社

◎ 読者の皆様へのお願い —

弊会会員の年会費、つまり月刊誌『浄土』の年間購読代金を、既報の通り、三、〇〇〇円といたしましたが、その後会員諸兄の暖かいご配慮、ご支援をいただいてまことにありがたく思っております。

さて、この機会に、『浄土』誌と会員諸兄の皆様とのより一層の繋がりをはかるために、従来よりたびたび企画されたことでもあります。誌面の数ページをさいて、新たに「読者のコーナー」を設けたいと思います。左記要領で、どうぞ振ってご投稿下さい。誌面充実のために、宜しくご協力下さいませ。

- 一、内容 自由 (生活の一幕や所感あるいは思うことなどをゴッセイ風におまゝとめ下さい。)
- 一、枚数 四百字用紙五枚程度
- 一、締切 毎月五日

法然上人讃仰会

「浄土」購読規定

会費一カ年 金三、〇〇〇円

(送料不要)

浄土 四十八巻 七月号

昭和十年五月二日

第三種郵便物認可

昭和五十七年 六月二十五日 印刷

昭和五十七年 七月 一日 発行

編集人 宮林 昭彦

発行人 佐藤 密雄

印刷人 関 二三男

印刷所 長谷川印刷株式会社

東京都千代田区飯田橋一―十一―六

発行所 法然上人讃仰会

電話東京二六二局五九四四番

〒一三三 振替東京八一八二一七番

あなたの本を 作ってみませんか

日頃お書き留めの原稿をこの際ご整理なさって、あなたご自身の本を作ってみませんか。物価高の折から当社ではなるべく経費をかけないであなたの本ができますよう、ご協力させていただきます。

A 5 判・100頁～150頁＝200部 35万～50万円ご用意下さい。遠方でも出張いたします。

そのほか、句集・歌集・詩集等の出版もお気軽にご相談下さい。

月影伝道用箋 宗祖法然上人の御詠月影のみ歌を側面に刷込んであります。伝道教化にご利用下さい。

定価 1 冊300円、5 冊以上 単価250円（送料実費）

なお、あなたの座右の銘、警句、格言等の刷込んだ別註用箋も謹製させていただきます。

有限会社 ルンビニ社 出版部
東京都千代田区神田須田町 2 - 3 - 11
電話 (253) 3520・3529